

7. おわりに

蛙目粘土・蛙目珪砂の郷岐阜県山岡町原地区の近況を紹介した。日本の陶磁器産業を支える縁の下の力持ちとして貢献して約100年がたとうとしている。この原地区の小さな堆積盆地の中の粘土・珪砂資源も次第次第に残りの鉱量が減少している。採掘が組合で一本化され、合理化された。一刻も長く良質な粘土・珪砂を生産し、日本の産業、ひいては私達の暮らしを支えて欲しいものである。

原陶土産業(株)丸原鉱山の皆様には、採掘場を見学させていただくとともに、この地区の開発の経緯や粘土の産状について教えていただいた。また岐阜県セラミックス技術研究所の加藤 工研究員には、採掘場に同行いただき、粘土の品質など

についてお教えいただいた。ここに記して謝意を表する。

文 献

- 大塚寅男・福尾権一・勝島秀夫・池田慎治・種村光郎・小林正範・朽名重治・黒川得洋(1990):東濃地方の窯業原料地下資源調査報告,岐阜県地下資源調査報告, no.2, p.18.
 大江二郎(1950):岐阜県原付近蛙目粘土及木節粘土調査報告. 地質調査速報, no.108, 地質調査所.
 中山勝博(1990):東海層群-2, 美濃地方. アーバンクボタ, no.29, p.13-15. (株)クボタ.
 下坂康哉・中山勝博・倉林三郎(1990):やきもの用粘土をめぐる一木節粘土・蛙目粘土を中心に. アーバンクボタ, no.29, p.48-64. (株)クボタ.

SUDO Sadahisa (2000): Kaolin clay (Gaeromenendo) deposits of Hara area, Yamaoka town, Gifu prefecture, Central Japan.

<受付:2000年6月8日>

話 題

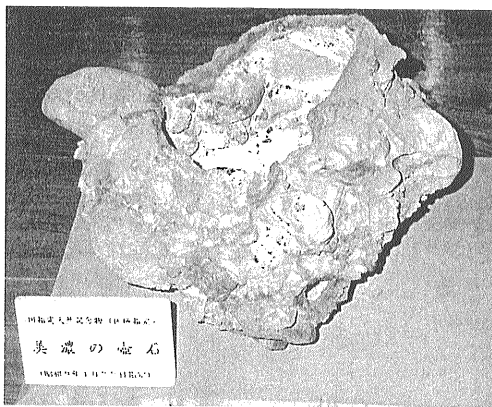
美濃の壺石

地図を見ると岐阜県土岐市の市街地の南側丘陵地帯の何ヶ所かに「美濃の壺石」という表示がある。この丘陵地帯で砂礫層を削ると中から壺の形をした石が出てくる。これが美濃の壺石で、昭和9年に国の天然記念物に指定されている。

今ではなかなか、立派な壺石をみる事ができないというのが、地元土岐市役所には立派な壺石が展示されている(写真)。これを見るとたしかに、直径50cmほどで、壺の形をしている。この壺はどんなふうにしたのだろうか?この展示品を見て考えてみた。

岩石としては砂礫岩である。真中に球状の白色部があり、そのまわりを赤褐色の鉄の水酸物が厚さ3~5cmに膠着して、これが壺の形を作っているようだ。

この付近の粘土層や砂礫層中には、シデライトという鉱物がノジュール(団塊)をつくっているのがよく観察される。シデライトは鉄の炭酸塩鉱物(FeCO₃)である。弱酸性の雨水や地



下水が、シデライト・ノジュールに接触するとシデライトは分解され、鉄分は酸化鉄となりその場に沈着する。このような作用により次第に厚い酸化鉄の層ができ、この壺を作り上げていったのではないだろうか? 壺を見た地質屋が考えた1つの仮説である。

地元にはきっと「壺石」に詳しい方がおられるのにちがいない。本当の成因を教えていただけると幸いである。

(須藤定久)